

氏 名（本籍）	尹 泰 九（韓 国） <small>ゆん て ぐ</small>		
学 位 の 種 類	博 士（デザイン学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 5452 号		
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	展示におけるマインズオンに関する研究 ーデザインフェアを事例とするコネクタの役割ー		
主 査	筑波大学准教授	博士（工学）	花 里 俊 廣
副 査	筑波大学教授		逢 坂 卓 郎
副 査	筑波大学教授	博士（デザイン学）	蓮 見 孝
副 査	筑波大学教授	博士（感性科学）	山 中 敏 正

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### （目的）

本研究は、一般的な博物館や美術館における展示に対し、近年活発に開催されるようになったアートマーケットやデザインフェアというようなプラットフォーム型展示に注目するとともに、見せるだけに留まっていたハンズオフ型展示がハンズオンやマインズオン型に発展しつつある世界の展示形態の変化の趨勢をとらえながら、ハンズオン／マインズオン展示を効果的に運営するために出展者と鑑賞者をつなぐコネクタという新たな役割の必要性を仮説的に提示し、日韓のデザインフェアにおいて実践的にコネクタの役割を演じながら、その効果と発展性について論じることを目的としている。

### （対象と方法）

本研究では、始めにハンズオン／マインズオンを研究する前提として、先進的な展示を実践している世界各国の複数の博物館の調査との比較分析をおこない、ハンズオン／マインズオンの特性や効果について論考する。その上でマインズオン展示をより効果的にすると考えられるコネクタによる体験型のワークショップを筆者自らが企画・設計・運営し、実際のデザインフェアにおいて実践し、その記録を分析することにより、マインズオンとコネクタの特性や効果を明らかにしようとする。

### （結果）

コネクタが参画するマインズオン展示を日韓両国で計 3 回実施し、仮説の検証を進めた。

第 1 は、韓国で開催された光州デザインビエンナーレである。筆者自らがコネクタとして参画し、フリーで作品制作をおこなうデザイナー（出展者）と協働して、同じ作品と会場を用いて、ハンズオフ展示、ハンズオン展示、マインズオン展示という 3 種類の異なった展示形態を設定し、鑑賞者のとらえ方の違いを分析した。その結果、鑑賞者はマインズオン展示でのワークショップの体験を通してよりよく展示物とデザイナーの考えを理解し批評する傾向が明らかとなり、マインズオンの優位性が立証された。

第 2 は東京デザイナーズウィーク、そして第 3 はソウルデザインウィークにおけるワークショップとコネクタの実践である。両展示においては、事前にデザイナーと密接に連携してワークショップの主題を決める

とともに、鑑賞者の率直な評価を導きだすこととができる手法開発を試みながら、鑑賞者の率直な感じ方の情報収集に努めた。日本的なもの、韓国的なものを、クレヨンを用いて色相選択させるワークショップをおこない、その結果、両国の鑑賞者の文化的趣向の差異を明らかにした。さら展示修了後、デザイナーにインタビューし、そのフリーコメントをラダーリング法で構造化することにより、デザイナーがデザインの改善をおこなうためにワークショップとコネクタの役割が有効であると判断していることを明らかにした。

#### (考察)

本研究では、一般的な展示で活躍する学生員、キュレータ、インタプリタなどの多様な展示サポート機能に対して、近年活発に開催されるようになったデザインフェアにおける展示サポートの不在に注目した。出展者であるデザイナーと鑑賞者をつなぐ役割であるコネクタの必要性を仮説として提案し、3つのデザインフェアにおいて実践的にワークショップを企画・運営しながら筆者自身がコネクタの役割を演じ、実践的にデータを収集して、その有効性を確かめた。この研究から、次のような結果を導き出している。

展示施設とテーマの違いにより一概には示し得ないものの、五感に働きかけ体験を志向するハンズオン展示は、一般的なハンズオフ展示より鑑賞者の理解度が高い。マインズオンは、展示効率が低く鑑賞者の負担が高くなりがちという欠点を有するものの、展示への鑑賞者の理解度は高い。ワークショップをおこなうことにより、鑑賞者は体験的にデザイナーの考えをよりよく理解し、さらにそれを批評することができるようになる。またデザイナーは展示物についての鑑賞者の反応とアイデアを知ることができデザインの改善に供することができる。コネクタの役割は定かに位置付けられていないものの、デザイナーとコネクタがコンソーシアムのような組織を構築することにより、将来的には職能化される可能性が考えられる。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、新たな展示形態であるマインズオンや新たな展示サポート機能であるコネクタの有効性を検証している。マインズオンが人の感性に係わるものであるが故に、その存在意義を定量的、定性的に捉え切れていない点や、コネクタの有効性は理解できるものの、それが職能として成立する必然性を明確に示し得ていない点など、さらに検討する余地を残している。しかしデザインフェアという今日的な展示において、展示の社会的効果をより高め得るワークショップやコネクタの働きを、実際の展示において実践的に確かめようとした意欲的な研究姿勢と、そこから導き出された結論は、デザイン学の研究成果として確かな価値を持つものと考えられる。

よって、著者は博士（デザイン学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。